

第1回 第3次海上の森保全活用計画策定検討委員会 議事録

日 時：2025年2月7日（金）

午前10時00分から午前11時52分まで

場 所：あいち海上の森センター 3階研修室

出席者：委員5名、県7名、傍聴者2名

1. あいさつ

あいち海上の森センター所長 藤野 繁春

2. 委員紹介、座長選出、座長あいさつ

3. 検討事項

第3次海上の森保全活用計画の方向、方策等について

「第3次海上の森保全活用計画の方向、方策等について」について、事務局から説明（資料1から資料5）

【座長】はい、ありがとうございます。これからは意見をどんどん出していただきまして、日ごろの活動の中で思っていること、それから今の説明を聞いて思ったこと、「こういうことを新たにやったほうがいいんじゃないか」とか、どんどん話していただければ。

では、さっきと逆で〇〇委員のほうからお伺いしてもいいですか。

ちょっと僕から色々質問させていただいてもいいですか。

今日たぶん初めてお話するのかなと思いますけれど、日頃の調査の活動というのはどういう感じでやられているんですか。

【〇〇委員】調査は毎週木曜日に「生物季節調査」をして、こちらにみえる散策を楽しんでいる方にみどころの資料を毎週更新しています。今でしたらマンサクが満開になっています。そういう情報を1枚にしてセンターとサテライトに置いてもらって、必ず売り切れ状態になっているので、楽しんでくださっている方がいらっしゃるのかなと感じています。

【座長】そうですか。そのことをすみません、僕全然知らなくて。

【〇〇委員】先ほどこっちと言わなかったのですが、モニタリング1000のほうも参加しておりまして、チョウ、鳥、植物の調査に関わっています。

【座長】毎週木曜日の調査は何人くらい集まれるんですか。

【〇〇委員】20名弱。

【座長】毎週20人くらい。

【〇〇委員】15～20名くらいですね。

【座長】調査は具体的にはどういう。

【〇〇委員】2つのコースがありまして、
センター → 湿地 → サテライト → 赤池 → センター というコースと、
入口駐車場 → 森林の中 → 里の田んぼ → サテライト というコース。
2つのグループはサテライトで合流して意見交換などをして、またコースを分かれて帰るという感じです。

【座長】そこで歩きながらどういう生き物がいたり、ということですか。

【〇〇委員】そうですね。割と人がいるところ、センターとか里には飽きることなく変化

があるというか生き物がたくさんいる。あと田んぼ、私ちょっと田んぼの作業もしているものですから、「木曜日の観察では見れない生き物が田んぼ周辺にいる」ということが最近気づいて、カヤネズミとかヒメタイコウチ、アカハライモリとか、いつもの観察場所では見れない生き物が田んぼにはたくさんいるということも、最近になってわかるようになりました。

【座長】その資料は〇〇委員が作られているのですか。

【〇〇委員】作るのは各コースで1名、私のほうは「湿地コース」というのですが、湿地コースでは順番に4人くらいが作って、あとはエクセルでその日にあった植物と鳥と虫、木の花などを記録して、その記録したものを12月に集計してセンターにお送りする作業があります。

【座長】資料は何枚くらい刷られるのですか。

【事務局】資料は1枚の紙で。

【座長】何部くらい。

【事務局】20部くらいですね。

【座長】印刷はこちらで、データをもらって、という形ですか。

【事務局】はい、そうですね。

【座長】それがだいたい捌けてしまうと。

【〇〇委員】そうですね。

【座長】モニタリング1000はどういうことをやられているのですか。

【〇〇委員】チョウと鳥は隔週の火曜日、植物が月の第2土曜日です。

【座長】かなりの頻度ですね。

【〇〇委員】そうですね、あとは鳥がちょっと時期がありまして、活動の少ない時期はお休み、とかそういうふうに間は空いてはいるんですが。

【座長】モニタリング1000の結果はどういう形で。環境省のほうですよ。

【〇〇委員】日本自然保護協会ですね。毎回それは送っています。

【座長】来られている方、毎週 15 人、20 人が集まられてすごいと思うのですが、どういう方が多いんですか。この近辺の方たちですか。

【〇〇委員】割と豊明とか緑区とか。周辺の方もいらっしゃるし、1 時間前後かけて来る人も何人かいます。

【座長】男女でいうとどれくらい。

【〇〇委員】男女で言うと半々くらいですかね。あまり意識したことないですけど。

【座長】平日なので親子連れとかではない。

【〇〇委員】そうですね、だいぶ大人の人が多いです。

【座長】〇〇委員自身は 8 年くらい。

【〇〇委員】そうですね、9 年目ですね。

【座長】毎週のように来られていて、何か変化を感じた部分ってありますか。9 年間で。

【〇〇委員】自分のことですか。

【座長】森と自分との関わりを含めて。

【〇〇委員】そもそもここに通いたいと思ったのは、自分の子育てで「自然の中で子供を育てたい」と思っていて、そういうふうで母として自然の中を駆け巡っていたのですが、子供が卒業してから今度は「自分がどうやって余生を生きたいか」と思うようになって、自然を保護するじゃないですけど、自然に関わった一生を送りたいと思って、それは愛知県で探したんですけど、海上の森が一番自分のやりたいことが詰まっていて、これだけ万博とかで終わった後に残されたということで。うちの近くだと割と自然のところだとハッチョウトンボが棲んでいたところもあったんですけど、全部なくなって住宅になってしまっ。そういうところで心が折れていて、海上の森はまだ大丈夫だろうということで。

【座長】最初のきっかけはどういう感じだったんですか。

【〇〇委員】最初は、自分の子供が小さかった時に、子供の自然観察会というのを〇区でサポーターをやっていて、それで何度か愛知県の自然の場所ということで海上の森を訪れたときに、ここは大人として子供に胸を張って「これが自然だ」って言えるんじゃないかと思いました。

【座長】はい、ありがとうございました。その「これが自然だ」という感じは9年間大丈夫な形ですか。

【〇〇委員】ここにも書いてありましたけれど、大人が盗掘したり、イノシシの被害で里の田んぼとかが荒れてきたというか、前よりはガタガタしているかなと思います。

【座長】はい、ありがとうございます。

【〇〇委員】外来種も増えましたね。見たことないような昆虫がちらほら出てきています。

【座長】それは気候とかもあるかもしれませんね。

【〇〇委員】そうですね。

【座長】はい、ありがとうございました。全然知りませんでした。
はい、では〇〇委員のほうから。

【〇〇委員】私も今日初めて見させていただいたので、何を話していいのかなというのが正直なところなんですけれど。私は行政の立場で、環境基本計画のようなバイブルを持っていろんな形で取り組んでおるわけなんですけれども、本当にざっと見ただけでなかなか難しいのですけれど、活動をすごくいっぱいやられて来られて、企業さんや大学さんも入られる中で「協働ってこれからの肝だよ」というお話を先ほどされたと思うのですけれど、我々瀬戸市のほうでもそこをすごく重要視しているところであって、言うのは簡単なんですけれど、なかなか実行に移していく、結果を出していくというのは非常にハードルが高いところであって、そのあたりを瀬戸市も含めてやっていけるといいな、という感想です。あとはどこで切り込んでいいのかというのも正直。

【座長】地元ということで、瀬戸市さんも環境学習とか市民の方との協働ということで一生懸命やられているのですけれど、ここ（海上の森）を活用した活動というのも色々ありますよね。

【〇〇委員】そんなにはなくて、「せと環境塾」の中で認定講座を実施いただいている部分はあるのですが、瀬戸市独自、市主催の講座となると非常に薄いところではありますね。まんべんなくやっている部分もあるし、自然環境だけじゃなくていわゆるゴミ減量だとか色んな切り口で取り組んでいて、海上の森さんだけのものはなかなかできていないですね。

【座長】はい。ではまた何か気づいたらお願いします。
では〇〇委員、お願いします。

【〇〇委員】えっとですね、1つはですね「ふれあいの里」、里があるのですけれど、私の

イメージする里山に対してはちょっと程遠いと思います。周辺整備がかなり遅れている。例えばこの周辺の農地の周辺を見ていただくと、山のすそが綺麗に刈ってあって、動物が侵入しにくい状態にしてあったのですけれど、海上の里に行きますと、ボサボサっとなっていて、畑だけ管理しているものですから、里山というよりか「畑だけ管理している」。ということを感じますね。もう1つは農地を作るためには、稲作とか農業は何が大事かといいますと、光が大事なんです。このところに「農地周辺の間伐」と書いてあるのですけれど、農地周辺だけの間伐では追いつかないんじゃないかなと。ある程度農地周辺の木を皆伐してみて、どのように植生が動いていくのかとかを見ながら農地周辺の森林整備といえますか、「すそ」の管理だとか綺麗にしないと、私のイメージ的にはあまり綺麗な里地じゃない、ということを感じますね。私の田舎のほうにいきますと、必ず自分の家の周囲だとかを草刈して山の裾まで綺麗にしてある。ここはあまり綺麗じゃないと思っていて、過去にもそういう話があったようなのですけれど、結局急峻なので、会の人たちに入ってもらって事故になってもいかなので、逆に県のほうがある程度裾を綺麗にしてもらおうと、里の美しさがもっと出て来るんだろうなと思います。それからもう1つは、前からセンターと打合せしているのですけれど、ため池の管理がなかなかうまくいっていない。今までは「誰がため池の管理をするか」ということが明確になっていなかったのですけれど、今年の終わりごろ、12月頃ですかね、ため池については「県の施設」ということは明白なので、それを「誰が管理するか」となったら「県が中心になって管理する」という話でして、そのへんのところを何か位置付けてほしいなど。ため池というのはある程度泥抜きしてやったり、あとは話題に出るのがウシガエル。かなりあそこで繁殖しちゃっているのです、そういうものの撤去とかね、やっぱりやっていかないと綺麗な里地にはならないと思いますので、そのへんをちょっとやってもらったらどうかなと思っています。特に私は一度皆伐ということで、この地域でスギ・ヒノキを植えたのは、たぶん県有林が買ってるんですよ、明治時代にね。それのときに木が植えられそうなところは木を植えましょうということで、他のところはそのままにしておきましょうということで治山事業をやっていたのですけれど、それで木を植えたところが40年前くらいまでは県が手入れしておったのですけれど、それ以外はほとんど手入れしていなくて。あとは企業連携とかでやってはいるのですけれども、もう少し色々、木材利用ということ。林業ということもあって、里で暮らす人は林業で山から木を出して家を建てたということもあるものですから、そういうことも、「大きな循環」ということで見ていただくというのも1つのここの事業としてやってもいいんじゃないかと。そこには貴重な生物もありますのでそれを保護しながらそういうものも見せて「循環利用するんだよ」ということも、「それが里山だよ」ということをある程度PRしていてもいいんじゃないかなと思っています。急に言われてもぱっと出ないので思いつきだけで申し訳ないですけれど。

【座長】はい。では〇〇委員。

【〇〇委員】この保全活用計画の中でお話したら何かなるのかどうかはわからないのですが、海上の森で私たち活動させていただいてすごく感じることは、センターの職員さんの負荷が大きいというか。人数も足りないし人材も足りないんじゃないかというふうについて思っていて、例えば森で伐木とかの作業をするときに、それを私たち活動する団体の中だけでやるというのは難しいですし、それは安全管理上もまずいということで、それを指導したり実働していただける方が〇〇さんだけだということがすごく大きな問題で、それ以外についてもイベントがめっちゃくちゃ多いのに、すごくてんやわんや皆さんされていて、その間に私たちが活動しようと思うとなかなかそこに手を入れていただくことができないということがあります。この保全活用計画でどうこうなることではない、逆に愛知県の財政というか森林保全課さんへの「どれくらいかけていただけるか」ということなのかもしれないですけど、そういったことが管理不足にもつながっていると思いますし、イベントもイベントで普及啓発というのもとても大事だと思うのですが、海上の森の管理というところをしっかりとさせていただく、そういったところに人数を割くことができるような体制にしていいただけると本当にもっともっと良いものになるのにな、と思っております。私も海上の森センターのオープンするときから関わらせていただいているのですが、その当時は爆発的に、万博の効果もあってたくさんの方がみえて、例えば「シデコブシを見に来た」というような方がたくさんいらっしゃったんですけども、その後10年くらいの中で万博という効果が薄れてお客さんが減ったなというような時期を見てきましたけれども、ここ10年くらいすごくまたお客さんが増えていて、やはり時代の要請ということもあったかと思うのですが、特にいろんなものが無くても、森があつて自然があつて花があつて虫がいて、というところに居場所を見つける人がたくさんみえて、例えば親子連れがすごく増えたりだとか、森の散策をする人がたくさんいたりだとか、それからそこを走る人がいたりだとか、ということで、海上の森を保全ではないかもしれないですけど、憩いの場として利用していらっしゃる方がすごく増えていると感じるので、そういう意味を含めて、その対応も職員さんにかかっている、「人足りないじゃん」といつも私は思っていて、そこが問題だなと思っています。

あともう1つですね、企業さんとのCSRだとかネイチャーポジティブ、カーボンニュートラル、というような話をいろんなところでしているのですが、海上の森は愛知県の企業にとってはすごいブランドであって、そこで森林活動・保全活動をするだとかCSR活動をすることが今でもすごく重要で魅力のあるものだと感じることが多くあります。なので「恵みの森」の整備ってそんなに進んでいるとは私は思えなくて、やってくださっている方は森の会さんなんかもやってくださっているのですが、企業さんとしてすごく積極的にどんどん木を伐って適正な森にしていくということに繋がっているところはあまり見受けられないなと思うんです。なのでそれをもうちょっと進められるような体制、

例えば森林組合さんですとか色んなところとの協働なのかどういった形なのかはわかりませんが、企業さんが中に入ってやりやすいような状況を作っていくと、企業さんも望んでいるし、県有林さんとしても望んでいるのかどうかはわかりませんが、いいものになっていくのではないかなと思います。そういったところに力を入れていただけたらいいかなと思っています。とりあえずのところ、以上です。

【座長】はい、ありがとうございます。では僕もいくつかありますけれども、まず森林保全はこの10年の評価をみると「間伐は計画どおりできました」という評価なんですね。間伐が必要なところの半分を10年間でやります、と。20年で1周します、ということで、それはできましたということなんですね。確かにずっと見ていると、まあまあ間伐できていると思います。絶望的なところはないですね。ただ、それがほぼ切り捨て間伐で、材を全く活用できていないという状況がちょっともったいないなと。なぜだろう、ということで色々聞いたら、その仕組みがあって、普通は林業やるには「森林経営計画」というのを作って、「5年間で計画的にここを間伐していきます」というのを国に出して国に認可してもらおうと補助金が出るんですね、国から。それでコストの半分くらいは出るんで、材を出して売っても赤字なんだけれど、その赤字を補填して少し利益が出るくらい国から補助金が出るんですけど、その場合は地主さんが経営計画を作るんですよね。作業は林業会社とか森林組合のほうでやってもらう。あるいは林業会社が立木を買ってやる、というようなことなんですけれども、ここは地主が県とはいえセンターではない。県有林事務所なんですよ。県有林としての管理者は県有林事務所であって、センターはそこから借りているということで、ここで間伐しているのは林業としてやっているわけではなくて、センターが毎年予算をとってそれですべてコストを払って間伐をして。なのでその木の持ち主じゃないのでセンターが。売ることができないとか売ってもセンターの収入にならない。なので毎年毎年センターが予算をとってこないで間伐できない。本当は補助金もらって木を売ればプラスになるんだけれど、そういうことが県の仕組み上できない。そういう問題があって、結構大変だと思うのですが予算をとってくる、苦労しながら予算をとって切り捨て間伐しかできない、という。そういう構図になっているということでいいですかね。なので、なんかそこをうまくできないですかね。むしろ県有林事務所のほうに全面的になにかこう乗り出してきてもらって、県有林事務所がやればいいんですよ、林業。森林経営計画作って。なので、何かそういうことはできないですか、というのが1つの意見。なので「普通の林業」をここでできるような仕組みをぜひ県のほうで考えていただけると。で、ぜひ材をちゃんと活用していただきたいなと。もちろん道を入れたりするのは難しいと思いますが、既にある道に出せる木もたくさんあるので、ぜひそれは検討していただきたいなというのが1点。

それから、〇〇委員がおっしゃられた里の周りの広葉樹ですよ、広葉樹の部分は全く放置されていて。田んぼの周りは広葉樹ですよ、結局何もしないで大きくなっていると

いう。そういう状況もあると思うんですね。なので「広葉樹をどうするのか」というのを2次計画に書いてあるんだけど全くやらなかったということだと思うんですね。なので広葉樹をどうするのかということを真剣に考えて。これも予算がいる話なんですけれど。やっぱり山際は皆伐してっていうのを僕も思うし、山の中の広葉樹もある程度小面積皆伐をして更新していくっていうのもあっていいのかなと。今は放置しているので、落葉樹はどんどん高木になり、その下から常緑樹がどんどん出てきて遷移が進む。遷移をみるのも教科書的なところなのなんですけれど、このままいくと常緑樹の森になるのでいいのですけれど、すべてがそうじゃなくてもいいのかなと思いますので、いろんな多様な広葉樹林があって欲しいと思うので、小面積皆伐、山際の皆伐はぜひ考えていただきたいなと。

それから、田んぼの話・イノシシの話なんですけれど、イノシシの害をどうするかということはずっと研究されていて、ある意味研究され尽くしていて、もう答えは出ていて、電気柵と、山裾にバッファゾーンを作るのと、狩猟の3点セット、というのではほぼ答えは出ているんですよね。なのでそれをしっかりやるということだと思いますし、そのモデル地区のような、ここをモデル地区にして「みなさん見てください」という取組をやるというかなと思うんですね。それはまた部署が違うわけで農業部門なので、その部署の方もぜひ巻き込んでいただいて。獣害対策の部署ね。なのでここをモデル地区のようにして、しっかりやるということが次の計画でできるといいなと思います。〇〇大学にその先生がいて、その先生に聞くと、電気柵の張り方1つで色々な方法があって、漠然と張ってもだめなので。もちろん高さだとかそういうのもあるんですけれど、結び方1つがいろんなノウハウがあって、それをちゃんと気を付けないと防げないという話ですよ。そういうのをぜひみんなで学びながら何かできるといいかなと。それもみんなで学びながらやればよいと思うんですよ。作業はみんなでやってそこで学びながら、そこで学んだことを地域で実践していくみたいな、そういう最先端な獣害対策のモデル地区にできるといいのかなと思いました。

それから講座のほうですけれども、海上の森アカデミーは10年前からはじめてすごく成果があつて。「森女」と「森の自然教育」と「里山暮らし」と、3つの講座をやっている。でも10年やってきたんで、ちょっと見直したほうがいいのか。ということで、それはそれでこの会議とは別にワーキンググループみたいなのを作って、改善というリニューアルをしていったらいいかなと思います。10年前にそれを行ったんですよ、「海上の森大学」というのをやってきたんだけど、これをリニューアルしましょうということで「海上の森アカデミー」になったので、もう1回リニューアルということでしたらいいかなと思うのですけれど。僕は「里山暮らしコース」に関わっているのですけれど、草木染とやきものの野焼きがメインなんですけれど、「これが里山暮らしか」と言われるとちょっと違和感があつて、アートなんですよ。里山のアートということだったら僕はすごくいいと思うので、それはそれでぜひ続けていただいて「里山のアートコース」みたいなので少しリニューアルして。グリーンウッドワークもやられていると思うのですがあれもアートかなと

思いますし、何かそういう「アートの講座」みたいなのが1つあるのかなと。それから「里山暮らし」のほうは、1区画活動場所を決めてみんなで再生していくというようなことができると魅力的だなと思いますね。もちろん里の一部でもいいですし、山の中に結構「昔田んぼだった」というところがあるんですよね。で、僕ら1区画ですけれど結構詳細な調査をやらせてもらったんですけど、そうしたらスギがば〜っと生えているところが昔田んぼだった、というところが結構あって。それから昔田んぼだったけれど今はスギは生えていないというところもあって、ただただ荒れているだけのところもあるんですよね。なんか山の中でもいいのかなと思うんですね。そこをかつての里山のようなものに再生していくという、そういう講座があってもいいのかなと。今の中山間地域は耕作放棄地がどんどん出てきていて、それから山の管理ができない、という状況のなかで、これも一種のモデル地区のような形で、「荒れてしまった里山をこうやったら再生できますよ」「そんなにお金もかけずに、みんなで楽しみながら、学びながら里山を再生できます」というようなモデル地区のようなものができると思うし、若い人たちも来ると思うんですよね。たまたま〇〇市の〇〇の森で昨年度から「1区画を再生していきましょう」ということで、デザインやどうしていくかということからみんなで考えてやっていきましょうという講座を始めたんですけど、そうしたら結構若い人が来てくれて。若い方、親子連れでも独身の方でも、そういうことをやればきっと来てくれると思うので。そういうこともぜひ考えていただければと思います。

とりあえずそんなところですね。何かセンターのほうからありますか。お話を聞いて思えばあれば。

【事務局】今日お話しを伺った中で「人が少ない」だとか色々ありまして、やはりマンパワー的にも役所のつらいところで、20年経って、10年ひと昔ということで2周りしたところで、3周り目に入るのですが、やっぱり役所というのは10年経つと人が減って予算も減ってきて20年経つともっと減ってきてという、非常につらいところで3周り目の計画を作るのですが、その中で当然海上の森の活動というのは「県民の皆さんと協働してやっていく」ということで海上の森の会さんを中心に活動してきていて、先ほど〇〇委員も言われたのですが、要するに高齢化の問題もあったり、人や会費が少なくなってきたり、県も（予算が）減ってきたし森の会も減ってきたということで、どうしたらいいのかなというところですが解決策がないというのが正直なところでして。予算的にはどうしても少なくなってくるものですから、マンパワーも少なくなってきたりやりたいことはいっぱいあるのですが、どういう計画ができるのかまだ全然固まっていはいないのですが、とりあえず話だけは伺って、次の時に少しでも解答できればいいなと。今日は録音もしているものですから、内容はすべて記録に残っているものですから、なるべく次の会議で返事ができればいいなと。今日はちょっと返事ができそうもないので。

【座長】ええ、もちろんです。

【事務局】なので今日は「聞かせてもらおう」ということで。今すぐ「こうします、あします」と言えると本当はいいんですけど。私どもも少ないなりに色々に対応していてですね、来るお客さんも多岐にわたっていて、センター駐車場に車を停めていく人をみると、登山に行く人もある程度一定数いて、「ここから猿投山に行きます」ということで数人の常連の方がいらっしゃったり、あとバードウォッチングというか鳥を見に来る方は一年中みえる。あと自然観察ということで毎週木曜日に会のほうで花だとか虫だとか。個人ではクモ専門に見ている人だとか。クモ専門でずっと愛知県だとかあちこちまわっている人だとか、鳥専門でまわっている人だとか。そういった方もいるので、そういった方々に対してどういうふうに対応していったらいいのかなというところで悩んでいるところです。一番最悪なのは人と予算が縮小してきてしまうということで、なんともしようがないところがあるんですけど、そこでどうやっていくのかなと。で、海上の森センターというのは保全活用でアカデミーとかの講座をやっているのですが、そういった講座の受講生の方が、OBの方が先ほどの〇〇先生の〇〇での活動のほうにも行ってみえるということもあったり、一定数の方が残って活動に付き合っているということがあるものですから、そういった方の位置づけみたいなのを次の計画の中でできたらいいなというふうに思っています。講座を受けてもらって海上の森センターで関わってくれる方が若干いるものですから、そういった方々の固定化といいますか位置づけというのをできたら非常にいいかなと思います。ここは予算をあまりかけなくてもできそうな感じがするものですから、今あるものにちょっとう受け皿の中に入れることができたらいいかなと思っているところです。今のところそんなところなのですけど。

【〇〇委員】すごくお気持ちがよくわかって、「ごもつとも」という話ばかりです。

【座長】1つ思ったのは、散策に来られる方の数が把握できていないですよ、たぶん。

【事務局】来場者数と、一応統計はとっています。

【座長】どういった形でとられていますか。

【事務局】森に来られる方は人数のカウントが難しいものですから、トイレを使った量で「これくらい」というような集計はしています。

【座長】それをもう少しきちんとやったほうがいいと思っていて、赤外線センサーのカウンターとかそんな高いものじゃなくてもあるものですから。で、どこに行っているのか、どこを歩いているのかというのをカウンターを何か所か置いて、駐車場だけじゃなくて、その方たちがどこに行っているのかという量的な把握がまず必要なかなと。それからニーズですよ、みなさん何をもって何を魅力に思っているのか。ニーズの調査もぜひやれるといいなと思っていて、それはアンケート調査とかになるんですけど、みんな

なスマホ持っているのでQRコードをとことろ置いておいてそこで「アンケート教えてください」というようなふうにしておけば、1年間やっていればかなりの数集まると思うので、なんかそういうお金をかけずにできる方法も色々あると思うので、ぜひ〇〇委員おっしゃったような居場所として、「自然観察」とかそういうことじゃなくてただただここがいいなと思っている人たちのニーズをしっかりと把握する必要があるのかなと。それに対してどういう支援というか管理とかやっていったらいいのかというのが次の計画にあればいいのかなと。すぐにはできないと思いますので、次の計画の中でそういう調査をぜひやっていただくといいかなと。

あといかがでしょう。何でも、もちろん。

【〇〇委員】いいですか。海上の森のサテライトのトイレの問題なのですが、私月に1度必ず皆さんを連れてガイドでまわっていて、固定の方々ばかりですが、皆さんが「お金払うから直して」っておっしゃられるんです。それこそ富士山の山小屋のトイレだとかと同じように例えば100円入れて気持ちをいただいてトイレを管理するだとか、そういうような、「予算がない」とおっしゃるのであればお金を県民の方からいただいて、何か施設を。施設もだいぶ老朽化しているじゃないですか。すごい心が痛むんですけど、20年見ていると、ピカピカだったところが「怪我するといけなから」と囲いして、みたいなそういうのってものすごく大変だと思うので、そういうたぶん心ある人たちは、海上の森を愛している人たちはたくさんいらっしゃるので、そんなことを例えば床、デッキを貼るのをみんなで製材して、海上の森の伐り捨ての木を使って、みたいなことができるような何か、そういうシステムとかどういうふうにすればいいか私全然想像もつかないんですけど、そういったことができるような。それこそ「海上の森は愛知県みんなの宝」みたいな感じで。だからみんなで綺麗にするし、みんなで直すし、みたいなことをする活動をしたいなと私は今思っているのですが、なんかそういうことができないのかなと思いました。

それともう1つは、職員の皆さんの意見も聞きたいなと思いました。所長だけでなく、皆さんの。たぶん色んなことを思われていると思いますので。ずっと「もっと良くしよう」と思っていられる方だと思うので、そういう方々のご意見も聞いて、そこに反映できることがあったらいいのかなと思いました。

【事務局】トイレ問題は20年使ってきて、施設が10年くらいでボロボロになっちゃって、「エコトイレ」といって自然に分解する微生物の力で、というトイレで、発想としては非常にいいものだと思うのですが、処理能力があまり高くなくて、特にイベントとかやって一気にお客さんが来るとちょっと消化できない仕組みのトイレで、それを一気に改善するとなるとまた予算の話に戻ってなかなか難しい面もあるので、正直言って管理している我々職員からしてもあのトイレはなかなかお荷物で厄介なんです。すぐ故障するし、消化能力が低いし、ということで、できれば水洗といいますかくみ取りでもいいのかもし

れないですけど、もっとお金を掛ければ回転するような仕組みにしたいなと思うのですけれども、何せバイオの力で分解するという仕組みなものですから、ちょっと仕組みが、当初はよかったのですけれども。

【〇〇委員】発想はよかったですね。

【事務局】ええ。20年位前に結構流行っていて、一時やっていて屋外のトイレのシステムであれを採用したのですけれども、今となっては、後々管理している者としてはつらいな、というのが正直ありますので。

【〇〇委員】トイレが綺麗なところには人が絶対集まります。断言してもいいと思います。

【事務局】それは充分わかりますね。

【〇〇委員】今公衆トイレもすごく綺麗になっていますし、なんとかならないですかね。

【〇〇委員】1年以上あの状態なのに、「県は何も手を打たない」というのはめっちゃくちゃ不自然。

【〇〇委員】「ひどいよね」と思いました。

【〇〇委員】業者がいなくて話もあるんだけど、1年間ですよ。去年の段階で予算化して動くなんていう話で、実際問題1年以上あの状態というのがもうめっちゃくちゃ「県のサービス低下」というか。

【事務局】水を流すのが止まったことですね。それは2月の下旬くらい分かったのですが、その時点でもう予算は組めないような状態で、予算がついたのが7月くらいだったかと思います。それでもうちの予算は修繕の高額なものがないものですから、「指定修繕」といって他所からもらってこなきゃいけないっていうので、その手続きでかなり時間がかかってしまったというのがあります。今回長期間皆さんにご負担かけてしまったかなというところですね。

【〇〇委員】みんなお金払いますよ。なんかそういうのってどうかできないんですかね。

【座長】「センターのほうで管理します」という、この森もそうだし、だけどそれができなくなってきたという話だから、もっと県民に頼ったらい、頼る仕組みを作ったらいと思いますね。

【〇〇委員】トイレって結構「有料トイレ」もあるんで、っていう話もありますよね。

【座長】その「ガイドしている」というのはどういう。

【〇〇委員】民間のカルチャーセンターの活動で月に2回ずつ海上の森を歩いている人たちがいるんで。私はその講師の1人で、1ヶ月に1回ずつ2人で担当しているのですけれども、もう10年以上通っていらっしゃる方もいて、という感じですね。とにかく海上の森、「1周、1年周ったらもういいんじゃない？」って私は思うんですけれど、ずっと来ています。毎年、「ここにはこの花が咲く」「この時期に行ったらこれがある」というのをすごく楽しみにしていらっしゃる方がずっと20人くらいいらっしゃって、というふうです。そういうのを見ても、やっぱりいつまでも海上の森を、「それがないと私は暮らしていけない、このまま歳をとって死ぬことになる」って思って来てくださる方がたくさんいる。あと最近よく会うのは、毎日かどうかはわからないですけどランナーの皆さんが多いです。私の友達もランナーで「ここが練習コースだ」とトレランやっていたらっしゃいます。

【〇〇委員】講座をするにしても、ウォッチングとかこども講座とか、あと調査グループのこととか海上の森の催しについても、近くの人が来てくれない。やはり海上の森の近隣の人たちが大きな力で支えるのが一番重心がある力だと思うのですけれども、割と名古屋市内とか30分以上かけて通っている人が多くて、協力している人たちもやっぱり遠くの人。たまに講座で近くの人が来るんですけれど、「初めて来た」という人が多い。なんでみんな知らないんだろう、っていうのがとても不思議。もう少し、どうやったらみんなに知ってもらえるのかな、っていうふうに考えているんですけれど。ネット、SNSとかそういうことを始めても、やはり遠くの方のほうのキャッチ力があるというか。少し身近な人に「こないいいところがあるんだよ」というのを知ってもらいたいなど。

【座長】僕も思います。色んな経緯があったので、ちょっとう「引いている人」もいるかもしれないですが。

【〇〇委員】私も9年前なので、それはよくわからないのですが。

【座長】あと、この辺の人も、この辺の地区もものすごい高齢化している。瀬戸でも、若い人がいるのはもっと街に近いほうですよ。

【〇〇委員】森の会でも「里山文化グループ」というのがあって、季節の行事っていうのをやっていて、本当に素晴らしいなと私は思うんです。杵で餅をついて、みんなで豊作を祈るじゃないですけど、人間以外の存在を十分に感じながら催す行事、地域の人が守ってきた文化を伝承する場でもあるし、そういうお話ができる人が近年減っていて、それをどうやって次の人たちに伝えていくかということも重要になってくと思うので、自然と文化と人の暮らし、というのをひっくるめて色んな人に知ってもらいたい。

【座長】その季節の行事は、年間どれくらいやっているんですか。

【〇〇委員】年間5、6回。3月に節句、5月にも節句、それから収穫祭だとかお正月の準備、どんど焼き。そんなのをやっていますけれど、一方でこの地域独特のもあって、「おこずな撒き」というのがあるんです。

【座長】おこずな撒き。

【〇〇委員】私初めてここに来て知ったんですけれど、そういう文化というものを一般の人へもっと知らしめるべきだろうということで、機会があれば私が出ていければ、「いわれ」だとか「この地域だけだよ」とか、子供たちがいるものですから、その節句のいわれだとかそういうものをなるべく話してやって、「だからこういうことをやるんですよ」と言う。それが地域の人と地域外の人と「この地域を知ってもらおう」ということなので、なるべくそういう機会があれば話すようにはしていますけれど、メンバーで〇〇さんがおられますが、その人に情報をもらって皆さんに説明するように。今度〇〇さんの聞き取りを全部またテーブル起こしなんかをしてホームページに載せようかなという企画が出ているので、私も楽しみにしているのですけれども。

【座長】「おこずな撒き」ってどういう。

【〇〇委員】おこずな撒きっていうのはですね、お正月の前に、正月に神様を迎えるんです。玄関・門から門松のところまで「はしご」を作るんです、赤土で。その向こうに太陽を描くんですけれど、お正月を過ぎるまではその上を歩いちゃいけない。お正月を過ぎたら歩いていいんですけれど。「神様を迎える道づくり」みたいなものがあるんですけれど、この地域以外にもあるみたいなんですけれど、あんまり私も聞いたことがないんで、この「おこずな撒き」っていうのがすごく私はおもしろいと思っていますけれど。それから「どういう人たちがこの地域に移り住んだか」というのが出てくるともっとおもしろいなど。一説によれば足助っていうのは「鈴木姓」っていうのがいっぱいあるんです。それで山を越えてここへ来た、という話を言われたことがあるので、どこから来てこの地域へ移住したのか、といういわれみたいなのを深堀してみると面白味があるのかなと。

それから私が子供たちに話すようにしているのは、この地域がなぜ瀬戸物が、なぜこの山が、というような話。例えば里のへんと屋戸湿地の奥では植生が全然違うんですね。なぜかという話をやっぱり子供たちに言い聞かせる、そうすると山に対して興味を持つようなそういう機会を増やさなきゃいかんなどということで。里と森の教室もただ単独で帰って来るだけだったので、ちょっとつまらんよという話で、今年は山の保全みたいな話、「森林がなぜ必要か」という話を子供たちに言い聞かせる。そういうのを今年ちょっとやってみたので、そういうことを知ってもらうのも重要な話なので、そんなことをやるようにはしています。

【座長】そういうのは本当に大事だと思いますね。僕がいた地域でも、いろんな昔の暮らしがあって、鳥を捕っていたんですね、かすみ網でね。渡り鳥を捕って食べる、ということなだけけれど、それがみんなものすごい楽しみで、山に小屋を作ってやっていて、それが戦後禁止されてできなくなったんだけれど。今 90 歳くらいの年寄りに話を聞くと、そんな話がいっぱい出てきて。きのことか山菜とかもものすごい種類があって、それをみんな食べていたって言うんです。聞いたことないような植物とかも食べていたらしくて、今ないんですよね、そういうのが。もう人工林になってそういうのが無くなったんですね。そういうのが少しでも残したりできるといいなと。そういう昔の暮らしとかね、集落の成り立ちとかね、そういうのも本当に大事なことですな。

【〇〇委員】里で暮らしている人は年々減っているというか、あんまり暮らしている人っていないじゃないですか。だけど「それでも里文化・里の周りの自然が守られる」というモデル地域にここをしたいです。人がいなくても。

【座長】そうですね。それは本当にそうで、今田舎の地域再生の仕事をしていますけれど、どんどん集落が消滅していくんですよ。「限界集落」という話なんで、年寄りばかりで、1 人、2 人、1 人減り、ということで最後はおばちゃんだけの村になるんですけど、「そうなった村をどうするんですか」という話があって、イタリアは日本よりそれが進んでいて、山のほうは日本よりもっと過疎が進んでいて、「昔何百人住んでいた村が今 5 人住んでいます」みたいなことがいっぱいあるんですね。そういう所はほとんどが消滅していくんだけれど、例えばイタリアで起きているのは、空き家だらけなんだけれどそれを買って旅行客用の部屋を作って、「分散型の宿」というんですけれど、お客さんに来てもらってそれぞれの家に連れて行って、レストランも 1 件あって、「アルベルゴ・ディフーズ」というんですけれど、それが今イタリアですごい流行っていて。だから住民は 5、6 人いるんだけれど、それ以外に観光客が年間でものすごい数、みたいな。そうやってその村が維持されているっていうような話がイタリアでは結構あるんです。日本でも 1 つの村の残り方としては、住民はいなくなるんだけれどそこで何か事業をやる人がそこで事業を展開する。観光施設もあるし、農業もあるし、魚の養殖とかそういうものもあるし。そういう事業をやる人が住み着いてその土地を引き継いでいく、みたいなそういう姿もあるんです。だからこの海上の里の住民はほとんどいなくなっちゃったんだけれど、この海上の森があるおかげで人が通ってくる里です、っていうことで今残っているんですよね。そういう残り方もある意味で 1 つのモデルとして、これから日本全国が限界集落だらけになっていく中で「どうやって守っていくんですか」というところでのモデルになったらいいかなと思うんですな。それが大事だと。

【〇〇委員】篠島、日間賀島だとか佐久島だとかに人を住まわせて、っていうのもありましたよね。そういうのに手を挙げてもらってもいいんじゃないですかね、海上の森も。

【〇〇委員】ちょっと今の保全活用計画の外の話になっちゃいますけれど、瀬戸市の市道が走ってるじゃないですか。それがあまりにもガタガタになっている。たぶん皆さんも同じこと思っていると思うのですが、「なんとかならんですかね」という話を会の中でもよく出るんですけど。

【座長】道ね。

【〇〇委員】なんとかならんかなと思うんです。もう少し綺麗にして、だんだんえぐれてきているんで、そのうちに車が上がっていけないとか、だんだん起きていくのかなと。なんとか瀬戸市さんに、私もこの間瀬戸市に行ったときに「なんとかしてよ」という話をしたんですけど、瀬戸市さんがやるか、変な話、雑談ですけど、「廃棄しちゃって林道にしてくれ」と。林道であれば県の事業でできるので、そういう手も賢いなと思って。「海上本線」という線が途中からあって、市道認定されているので県が手を出せないで、「奥のほうは市道認定外してくれ」という話だとか、入口のほうも直接自分たちで管理できるような形になってくれるといいなと思うのですが、あまりにもセンターの人が上に車で行くのにも大変だし、デコボコで、あれもいいのかもしれませんが、もうちょっと整備ができるといいなと思うので、センターのほうからもまた市役所のほうへ言っていたくいいなと思います。

【座長】普通は、住民がその要望をして市が直してくれるんですけど、その要望を出す住民がないんですよ。

【〇〇委員】そうなんですよ。だから相手にしてくれないという。ですけど利用者数では無茶苦茶多いと思うんですけどね、道の利用者数ね。なんかそういうのができるとね。

【座長】じゃあちょっとそれは宿題ですね。

【〇〇委員】「何万人が利用しています」という話があってもいいかなと。

【〇〇委員】すみません、もう1つだけ。企業連携のことですけども、たればの話をしてはいけないのかもしれませんが、海上の森が「自然共生サイト」に登録されるとして、今後来年度になると「それに対するサポートを企業さんがすると自然共生へのアドバンテージとして評価される」というようなこともあつたりしますよね。そういう中で、おそらく登録はされると思うので、企業が寄付をする仕組みとか、さっきからお金の話ばかりなんですけれど、お金がないと何ともならないという話なので、そういう仕組みをこの保全活用計画の中に盛り込んだり、企業連携の中に盛り込んでいったらどうかなと思いました。一般の人でもいいと思いますし、寄付してもらいましょう。以上です。

【座長】あの、ふるさと納税などはいかがですかね。

【〇〇委員】いいですね。

【座長】県でやっていますよね。やってないですかね。

【〇〇委員】やってないですね。県でやるのは「J-クレジット」。J-クレジットでやったやつは県有林に飛んで行っちゃうので、「ここの分だけ経費をJ-クレジットであげてくれ」という話が出てきたら出してくれないかね。

【〇〇委員】それは海上の森の利益にはならないですよ。

【〇〇委員】だから、その分は「海上の森の経費に回せ」という。そういうことが可能なら、J-クレジットは元々県有林から入ってるだけだから、その分「海上の森が管理しているのは海上の森センターなんだからセンターに金をくれ」というような話もありかなと。今県有林ってJ-クレジットの話ってどうだったっけ、進めるって話でしたよね。

【事務局】進めてはいると思います。たぶん中では話が進んでいると思います。

【座長】それはありですね。

【〇〇委員】全部向こうが持っていくんじゃないくて、「その分だけはあげてくれよ」という話はあるかなと。あそこは特別会計なのでちょっとやりにくい話ではあるかもしれませんが。

【座長】県内企業にやってもらえればいいですよ。

【〇〇委員】そうしてもらえればいいですね。たぶんこの間伐は「保安林」だから県の直轄事業でやっている部分が多いと思うんですよ。企業連携だとかそういうところの間伐は「その分は少なくともくれよ」というような話はあってもいいのかなと思うのですけれどもね。

【座長】確かに、企業も単に寄付するというのはなかなか難しいと思うので、J-クレジットで自分のところのお金を出してくれると出しやすいよね。

【〇〇委員】出しやすいですね。

【座長】じゃあそれは森林保全課の宿題ということで、お願いします。

【〇〇委員】持っていられないように。

【座長】はい。じゃあそろそろ時間ですが、あとどうですか。今日〇〇委員と〇〇委員がいらっしゃらないので、ぜひ次回、自然環境保全のほうは〇〇委員にぜひ色々出していたきたいなと。〇〇委員にも講座のこととかいろんな意見を出していただきたいなと。お2人については次回に自由に意見を言っていたきたいなと思いますが、いいですか、そんな感じで。

はい、じゃあ色んな意見をいただいて、とてもいい提案をしていただきましたので、宿題がたくさん出ましたがぜひ検討していただければと思います。

じゃあ私のほうはこれで終わります。どうもありがとうございました。お返しします。

【事務局】本日いただきましたご意見は、また調整して次の時に活かしたいなと思っております。また今日欠席されております2人の委員にもぜひ資料をお配りしてご意見を伺いたいなと思っております。本日はどうもありがとうございました。

次回の会議はスケジュールにありましたとおり、3月を今予定しております。あまり日付が無くて申し訳ないのですけれども、よろしく願いいたします。

以上で本日の検討委員会を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。